

## マタイによる福音書3章「王のための道備え」

### 1A 悔い改めによる備え 1-12

#### 1B 御国の宣告 1-4

##### 1C 預言者による予告 1-3

##### 2C エリヤのカ 4

#### 2B 御怒りからの救い 5-12

##### 1C 全住民の罪の告白 5-6

##### 2C 悔い改めにふさわしい実 7-10

##### 3C 聖霊と火のバプテスマ 11-12

### 2A バプテスマによる任命 13-17

#### 1B 主の受洗 13-15

#### 2B 天からの認証 16-17

## 本文

マタイによる福音書3章を開いてください。私たちは3章から、バプテスマ・ヨハネまた主ご自身によって、御国の福音を宣べ伝える働きが始まるところを読んでいます。

### 1A 悔い改めによる備え 1-12

#### 1B 御国の宣告 1-4

##### 1C 預言者による予告 1-3

1 そのころ、バプテスマのヨハネが現われ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。

「そのころ」と言っていますが、それはヨセフとマリヤが、幼子イエスを連れてエジプトから戻り、ナザレに行き、そこに住んでいた頃、ということです。ルカによる福音書の中に、イエス様が少年の時にどのように過ごされたのかを書き記していますが、それからかなりの年月が経ちました、30年近く経っています。

そのころに、「バプテスマのヨハネが現われ」とあります。ヨハネというのは、ヘブル語でヨハナンですが、当時、使徒ヨハネもそうですが、当時、ユダヤ人の間でありふれた名前でした。ですから、どのヨハネ、ヨハナンであるかを区別するために、バプテスマのヨハネと呼んでいます。彼が、水の洗礼、あるいは浸礼と呼んだほうが正確ですが、浸礼を授けているヨハネとして、人々から認められてきました。このヨハネが、四つの福音書においてどこにおいて、イエス様が公生涯、公の宣教活動をされる時に、必ず出て来る人です。それだけ、どの福音書の著者も、彼をイエス様の前を走る先駆者として立てられた、とても大切な人物として描いています。今日は、なぜそこまで必要であったのか、それ

を意識しながら読んでいきたいと思います。

そして、「ユダヤの荒野」で活動しています。この位置は、とても大切です。ユダヤの荒野は、ユダの山地と死海の間に広がっている荒野です。地中海から湿気のある風がイスラエルに吹き付けることによって、ユダの山地で雨となるのですが、そのために湿気を失った乾いた風が死海方面に吹きます。それで、ベエル・シェバから南に広がるネゲブよりずっと緯度は北にあるのですが、それでも荒野が広がっています。それはエルサレムの東にあるオリーブ山の裏手から早速始まり、エルサレムは豊かな緑に恵まれていても、すぐに乾いた地になります。

ここは、聖書の歴史において二つのことで特徴的です。一つは逃げる場所です。覚えていますか、ダビデがサウルの手から逃げましたが、エン・ゲディの洞穴に隠れていて、ちょうどサウルがその洞穴に入ってきました。その死海のほとりのオアシスはユダヤの荒野にあります。もう一つは、ユダヤの荒野の北の部分、ヨルダン川があり、そしてエリコの町がありますが、その辺りからかつてヨシュアたちが、ヨルダン川を渡河して約束の地に入りました。そして、エリシャがエリヤからその預言の働きを受け継ぐ時に、その辺りから二人でヨルダン川を渡りました。外套を脱いで、川を叩くと川が別れましたね。そしてエリヤが火の戦車に乗って天に引き上げられると、その外套を受け取って、またヨルダン川を打って、川が堰き止められたところから戻ってきました。ですから、この荒野は、約束の地に戻り、そして神の働きがそこから行われるところとして、神に用いられている所です。ですから、ヨハネがここで活動している時に、イスラエル全体がこれから神の働きが始まるのではないかという、深い期待があったと考えられます。

## 2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

四百年以上の神の沈黙の期間を経て、ついに神がヨハネを通して、語り始められました。その初めの言葉が午前礼拝でお話したように、「悔い改め」だったのです。「悔い改める」という言葉を聞くときに大事なのは、方向です。ヨハネは、「天の御国が近づいた」と言いました。これは天におられる神が王となり、支配しておられる国が近づいたということを意味します。これだけで、メシヤが来られたという意味合いも含まれます。

この国が近づいたから、メシヤが来られるから、だから悔い改めなさいと言ったのです。多くの場合、悔い改めを反省と勘違いしています。もちろん、自分の罪や欠けを悔いるという部分は含まれます。けれども、大事なのは主が支配されているところに、主ご自身が来られているので、主ご自身に立ち帰るということなのです。例えば、大阪にいる人が私たちに、「大阪に来てください」という時に、私たちは東京を離れることによって、大阪に行きます。大阪に来てくださいという時に、自ずと東京を離れるという意味合いを含むのです。ですから、東京から離れることも大事ですが、それよりも大阪のほうに向かうことに集中するのが必要なように、私たちは、自分を王とする、自分中心の生活から離れる

のですが、それ以上に、イエス様に集中して、イエス様を主とする王国のほうに行くということが大事です。自分の罪ばかりを見ていたら、罪から離れられません。イエス様、そしてその御国を見て、その支配の中に自分を明け渡すなら、自ずと自己中心の生活から離れることができるのです。

天の御国とありますが、これは神の国と同じ意味です。天というのは、神が王座に着いておられる、いわゆる天であります。ユダヤ人は神の名前を口にすることも恐れ多いと考えていたので、天と言い換えているのですが、マタイがユダヤ人を主に意識して書いているのだと思われます。その天にある神の支配が、この地上に来て近づいたのだというのが、天の御国の意味です。そしてこれが、心へりくだった者、心砕かれた者、悲しんでいる者たちに来るということを、預言者たちは教えていました。ゼパニヤが、このように教えました。「3:12-13 わたしは、あなたのうちに、へりくだった、寄るべのない民を残す。彼らはただ主の御名に身を避ける。イスラエルの残りの者は不正を行なわず、偽りを言わない。彼らの口の中には欺きの舌はない。…」このように教えて、それから彼は、主がエルサレムにおられる幻を話します。「3:14-15 シオンの娘よ。喜び歌え。イスラエルよ。喜び叫べ。エルサレムの娘よ。心の底から、喜び勝ち誇れ。主はあなたへの宣告を取り除き、あなたの敵を追い払われた。イスラエルの王、主は、あなたのただ中におられる。あなたはもう、わざわざを恐れない。」ですから、バプテスマのヨハネの教えは、これらの預言者の教えと変わりありません。へりくだって、罪を捨て、主のところに来た者たちには、このように、喜びに満ちた、イエス様の王国が待ち受けているのです。

3 この人は預言者イザヤによって、「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ。』』とされたその人である。

ヨハネの存在がなぜ重要なのかと言いますと、それは預言者たちが、主が来られる時にその前に道備えをする人々がいることを預言しているからです。マラキの預言では、「見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。(3:1)」とありましたが、ここはイザヤ 40 章の預言です。覚えていますが、イザヤ書は大きく二つに分けることができますが、1 章から 39 章までの前半と 40 章以降の後半です。前半は、神の裁きや懲らしめが教えられていましたが、後半から一気に慰めの言葉になります。「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。」という言葉から始まり、その労苦が終わり、咎が償われるという、罪の赦しの言葉から始まるのです。

そして 3 節から、次の言葉が始まります。「40:3-5 荒野に呼ばれる者の声がする。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。すべての谷は埋め立てられ、すべての山や丘は低くなる。盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。このようにして、主の栄光が現わされると、すべての者が共にこれを見る。主の口が語られたからだ。」「荒野」からということで、確かにユダヤの荒野からでした。そして、荒野というのは神の裁きの言葉が出て来るイメージがあります。そして、大路というのは、イザヤが好んでつかう言葉ですが、凸凹の道を均して、平らにします。国際

幹線道路です。王がエルサレムに入城するに当たって、この大路を利用します。ですから、王が来るのですから、凸凹の道を平らにしないといけません。王や偉大な指導者がいる国では、王が一つの町を通過するというだけで、街並みがかがらりと変わってしまう事がありますが、まさにそのような感じ

です。  
ところで、主であり、神である方がエルサレムに来られるので、その道を整えよと前もって呼びかけるとあり、そこをマタイはイエス様が来られることを告げるバプテスマのヨハネにあって成就していると言っています。そう神であり、ヤハウエである方とメシヤ、キリストを一つにしているのです。メシヤは、単なる人ではありません。神と同一の方です。

そして道備えをするのは、人々が悔い改めることによってそれができるのだ、ということです。考えてみると、四百年の月日がすでに、最後の預言者から経っています。その間、主ご自身を熱心に待っていたということ自体がすごいことでしょう。けれども、これから天の御国が来るということであれば、まだまだ準備できていないことが沢山あります。自分の心が主に真っ直ぐに向いていない、主の心から離れてしまっていたというのが一番の問題です。大きな変革、とてつもない偉大な神の業が行なわれるのに、先駆者による、悔い改めによって主に目を向け、そしてキリストが来た時に受け入れるという準備が必要です。

私たちも、主のすばらしい働きを期待していいのです。主は日本を愛し、西日暮里を愛し、そしてロゴス東京を愛しておられます。主が力強く働かれないと願われています。そのためには、心備え、準備が必要です。確かにイエス様が主として、王として私たちを満たされる時に、もし私たちが自分の罪や自己中心的な思いを持っていたら、すばらしい働きが裁きの働きになりかねません。使徒の働きで、アナニヤとサツピラが偽善の罪で死んでしまいました。私たちの心は、しっかりと主の言葉と御霊によって、耕されて、準備されないといけません。

#### 2C エリヤの力 4

4 このヨハネは、らくだの毛の着物を着、腰には皮の帯を締め、その食べ物はいなごと野蜜であった。

ヨハネは明らかに、エリヤの風貌をしています。イスラエルの王アハズヤが、「毛衣を着て、腰に皮帯を締めた人でした。」という報告を受けて、「それはティシュベ人エリヤだ。」と言っています(2列王 1:8)。その地域の荒野には、らくだが多いですが、「らくだの毛の着物」を着ています。腰には皮の帯で、それから、食べ物が「いなごと野蜜」ですね。いなごは、レビ記 11 章でいろいろな四つ足の昆虫が汚れているのに対して、羽があり、跳びはねる足を持っているのはきよいと呼ばれている昆虫の一つです。ですから、律法を重んじるユダヤ人らしい食べ物と言ってよいでしょう。そして野蜜ですが、聖書の中で例えばサムソンが、獅子の死骸の中に蜜があつてそれを食べたとか、ヨナタンがペリシテ人との戦いで、野蜜を食べて力を得たなど、イスラエルの地には野生の食べ物として栄養補給

の食べ物として出てきます。そして、この風貌と食べ物は、王宮にいる豪華な生活をしている王とは対照的な、王のしていることに対峙する預言者の姿にふさわしいです。

バプテスマのヨハネは、ルカによる福音書によれば、そのエリヤに働いておられた御霊と御力をもって主の前触れをします(1:17)。当時、王アハブがいて、イゼベルによってバアル信仰が国中に強かに推し進められていました。けれども、国としては繁栄して、安定していました。そこに、待ったをかけたのがエリヤです。雨が二・三年降らないようにと主に願って、それで飢饉が訪れました。アハブはエリヤを憎みました。けれども、バアルの預言者とエリヤとの対決で、天から火が降ってきたのはエリヤの神のほうでした。こうやって、神はエリヤによって、滅びへとまっしぐらに進んでいるイスラエルに、一人でも主に立ち帰ることによって、滅びから救われるために神に立てられたのです。それで、バプテスマのヨハネは待ったをかけます。誰に対してか？神の律法を守り、教えている指導者たちに対してであります。

## 2B 御怒りからの救い 5-12

### 1C 全住民の罪の告白 5-6

5 さて、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川沿いの全地域の人々がヨハネのところへ出て行き、6 自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けた。

ユダヤの国民全体が、ヨハネの働きによって動き出しました。エルサレムはユダヤ人の都ですから、もちろんのこと、ユダヤ地方全域、それからヨルダン川のところにペレアという地域がありますが、そこからどっと来ています。この言葉は、まるで地名が人であるかのような動詞が使われているのだそうです。地がうごめいたみたいなの、とてつもない神の働きが起こって、躍動している様子が描かれています。

そして、主の聖霊が働かれると必ず起こることは、「罪の告白と悔い改め」です。自分のこれまでのあり方を、神に対して罪を犯していたことを認め、そして主に心を尽くして立ち返ろうとすることです。箴言にこう書いてあります、「28:13 自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者は、あわれみを受ける。」私たちが、それぞれが、主との語らいの中で、自分のこれまでのあり方について、正直に、素直にその罪を告白する時を持ちたいですね。隠していると繁栄しない、成功しません。けれども、罪を言い表す者は憐れみを受けます。

それから、その罪の告白が、そして、悔い改めが本気であることを示すために、「バプテスマを受けた」とあります。バプテスマとは、浸ることです。そこから、「媒体といっしょになる、一つとなる」と意味が出てきます。白い布があって、それを紫色の染料に入れたら、紫色に一気に染まります。そこでユダヤ人は、清めの儀式の時に、水の中に全身を入れて、それで神によって洗われたことを示していました。そして異邦人がユダヤ教に改宗する時に、全身、水に浸かる浸礼によって、自分の神を知ら

ない異邦人を捨て、神の民と一つになったことを示していました。

ヨハネのバプテスマは、悔い改めのバプテスマです。自分が、口で悔い改めましたというだけでなく、本当に、本気で悔い改めていること、その罪の告白と悔い改めに一心になって捧げることを示すために、バプテスマを受けます。私たちは、しばしば頭だけ、信条だけ、けれども、生活や人生は別にして信仰を持つとします。日本の人たちは、聖書やキリスト教について、知的な興味はとても高いと言われますが、そこに自分の体を入れるとなると、感情的に強い抵抗があると言われますが、それを私は一つになると決めるのは、また別ですね。なので、バプテスマは大切な儀式であり、イエス様が受けるように命じられていることです。ところでキリスト者の命じられているバプテスマは、イエスの御名によるバプテスマ、この方につくバプテスマです。主が死なれ、葬られ、甦られました。子の福音の言葉をただ口で言い表すだけでなく、自分のからだをもって、この体がキリストと結ばれている、その罪に対する死、埋葬、そして新しい命にあって甦ったということを示しています。

### 2C 悔い改めにふさわしい実 7-10

7 しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。

パリサイ人とサドカイ人が出てきています。どちらもユダヤ教の中で、主な二つの宗派であり、ユダヤ人を宗教的にまとめていました。パリサイは「分離」という意味を表しています。主の律法に忠実になろうとしていました。ギリシヤ時代、貴族階級であり、ハスモン朝の王と屈託していたサドカイ派と言われる人々から分離したというところから来ています。彼らは、主の言葉を全て信じ、長い時代を経て、新しい環境の中でどのように律法を守ればよいのかを記した口伝律法も信じていました。そして預言書も全てを信じ、天使も悪魔も、死者の復活も信じ、メシヤが来られることを熱心に待ち望みました。それゆえ、庶民の間ではパリサイ派が最も影響力を持っていました。サドカイ派は、神殿礼拝を守る祭司長たちの間だけで受け入れられ、裕福であり、貴族たちでした。多神教のローマの中で自分たちの神殿礼拝が守られるように、政治のほうに関心がありました。律法は、口伝律法は信ぜず、モーセ五書のみ注目していたので、それで死者の復活はないと言っていたサドカイ派に対して、イエス様が出エジプト記から死者の復活を語られたのです。そして、紀元 70 年に神殿がローマによって破壊されると、律法の朗読と教え、また会堂を中心に行っていたパリサイ派が中心となり、現代のユダヤ教はパリサイ派の末裔と断言されています。

その教理面での違い、彼らの信仰や文化の違いで対立がありました。しかし、ここでは「パリサイ人やサドカイ人」と一括りにされています。これは、彼らがユダヤ人議会のサンヘドリンから来ているかもしれないことを表しています。ローマ時代において、ユダヤ人たちがその共同体の中で最終決定する議会が、サンヘドリンです。このサンヘドリンにはサドカイ派が多数を占めていましたが、庶民の

人気はパリサイ派にあったので、パリサイ派の主張も受け入れられていました。彼らが、バプテスマのヨハネの動きが、主から来たものなのか、どうなのか、それを調べに来たのではないかと思われます。ここに、「バプテスマを受けに来る」と言っていますが、これは単に「バプテスマに来た」としか書かれていません。受けようとしていたのかもしれませんが、それが目的ではありませんでした。

そのような彼らに対してヨハネは、驚くような宣告をするのです。「まむしのすえたち」です。彼らはアブラハムの子孫であるから、神の怒りから救われると信じていましたが、ヨハネははっきりと、その保証を真っ向から否定しました。「まむしのすえ」ですから、彼らはキリストによって踏みじられる蛇のほうにいて言っている訳です。しかも、まむしですが、毒を孕んでいます。正しいことを語っているとされながら、実は偽っている者たちについて、ダビデは詩篇でこのように呪いました。「58:1-5 力ある者よ。ほんとうに、おまえたちは義を語り、人の子らを公正にさばくのか。いや、心では不正を働き、地上では、おまえたちの手の暴虐を、はびこらせている。悪者どもは、母の胎を出たときから、踏み迷い、偽りを言う者どもは生まれたときからさまよっている。彼らは、蛇の毒のような毒を持ち、その耳をふさぐ耳しいのコブラのようだ。これは、蛇使いの声も、巧みに呪文を唱える者の声も、聞こうとしない。」

彼らは救われると信じ切っていましたから、ヨハネは、「だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。」と言っています。マラキ書を思い出してください、他の預言者たちもそうですが、ユダヤ人の間で主を恐れる者と、そうではなく滅ぼされる者たちがはっきり分かれることを一貫して教えています。神を知らない異邦人が滅び、我々は救われるという自動的なものではなかったのです。ユダヤ人の間で偶像礼拝をしていたら取り除かれ、へりくだり、主を恐れていたら、救いと癒しがあるのです。

そして何をもってその偽善があるのかというと、口で悔い改めると言っていることが、実を伴っていないことなのです。「悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」とヨハネは言っています。本当に悔い改めているならば、午前礼拝で学びましたように、生活に変化があるはずなのです。具体的にあるはずなのです。聖霊がその人を変えてくださいます。心が変わっていないのに、行ないが変わっていないのに、宗教儀式や見た目の活動だけはしっかりやっているのであれば、それは毒を持っている蛇のように、人々に害を与えていくということです。

9 『われわれの先祖はアブラハムだ。』と心の中で言うような考えではいけません。あなたがたに言うておくが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです。

バプテスマのヨハネは、彼らの心の中にあるものを話しました、「われわれの先祖はアブラハムだ。』と心の中で言うような考えではいけません。」と言っています。後に、イエス様と口論になった時に、彼らは「私たちの父はアブラハムです。(ヨハネ 10:39)」と言います。自分たちが、アブラハムの子孫だから、自動的に大丈夫と思っていたのです。イエス様が、彼らのご自分の言葉を信じてくれた

から、それで、「わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。(ヨハネ 8:31)」と言われて、あなた方は自由になると言われたのですが、反発したのです。自分たちが不自由、奴隷なわけではないとして反発して、そしてアブラハムの子孫なのだとして、反発したのです。自分たちをまむしの子にしてしまう原因、その毒を孕んでしまう原因は、自分は大丈夫だ、自分は正しいとすることです。主が語ってくださっているのに、自分はできているのだ、こんなに努力しているのだ、なぜそれを否定する！となるのです。聖霊に満たされた人は、心の中の奥深いところに触れられて、自分が神のように、キリストのように変えられることを強く望み、へりくだることができるはずなのです。その高ぶり、自分が大丈夫だというところを、はっきりとヨハネは責めています。

そして、「この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになる」と言われています。自分たちがアブラハムの子孫ということをごとさらに大事にするので、そこを誇りとして、高ぶっていたので、それで、「この石ころからでも」と言いました。ユダヤの荒野には、そうです、石ころが目の前に転がっています。そんなものからもアブラハムの子孫を、神はその全能の力と恵みによって起こすことがおできになります。つまり、私たちは石ころのようなものなのだと思います。自分たちが何かだから、主が大きなことを行なわれるのではなりません！自分たちが何でもないので、それでも主が恵みによって大きな働きを行なわれます。そして主の働きは、イスラエル人だけでなく、信仰によってアブラハムの子孫になる異邦人をも後に起こしてくださいます。

10 斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。

人の命、自尊心、栄誉とかいうものが、「木」に例えられています。覚えていますか、ネブカデネザル王がバビロンの威光や栄華を持っていた時、大きな木として例えられていました。ところが、高ぶったので、天から聖なる者にとって切り倒されましたが、根株だけが残り、そこに鎖が付けられました。ネブカデネザルの姿を示していたのです、彼は獣のようになり、鎖につながれて七つの時を過ごしました。人が低められるわけですが、今、自分たちは立っていると思っているその高ぶりが、根元から斧によって切り倒されるのだということです。

そして、「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」ということです。主が裁かれる時は、その木に実が結ばれているかどうかで量られます。もし良い実を結んでいなければ、切り倒されます。イエス様は十字架に付けられる前、弟子たちにも同じ事を語られましたね、ご自身がぶどうの木で、彼らが枝であり、イエス様の言葉に留まっているならば多くの実を結ぶが、実を結ばなければ、枝が集められ、火で焼かれることをイエス様は言われました。主の関心事は、これなのだということです。そして、イエス様はエルサレムに入って、出て行かれた時に、実を結んでいないいちじくの木を呪われましたが、それが現に紀元 70 年、ローマによってユダヤ人の神殿が破壊されたところで成就します。文字通り火の中に、神殿が投げ込まれました。

### 3C 聖霊と火のバプテスマ 11-12

11 私は、あなたがたが悔い改めるために、水のバプテスマを受けていますが、私のあとから来られる方は、私よりもさらに力のある方です。私はその方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。

バプテスマのヨハネは、自分に続いてなのですが、比較にならないほどの方が、また別のバプテスマを受けると言われています。「私よりもさらに力のある方」と言われます。先に話したように、ヨハネの授けるバプテスマは、悔い改めに自分を一つにするためのバプテスマでした。次は、そうではありません。まずヨハネは、「その方のはきものを脱がせてあげる値うちもありません」と言っています。履物を脱がせるのは、しもべが主人に対して行なうことです。つまり、自分はこの方のしもべにも値しない者である、ということです。私たちが、これだけイエス様が偉大であることが分かっているかどうか、吟味する必要があります。自分について、何様だとか全く思えなくなります。

そしてイエス様の授けるバプテスマが、「聖霊と火とのバプテスマ」と言っています。まず、聖霊のバプテスマについて考えたいと思います。イエス様はこれから、聖霊を受けられます。水のバプテスマを受けられた後に、聖霊が天から鳩のようにして下って来られます。そして、聖霊に満たされて、悪魔からの誘惑を受け、けれどもその誘惑を退け、御国の福音を宣べ伝えられます。聖霊の力によって、病を治し、悪霊を追い出され、恵みの言葉を語られます。そうした聖霊の働きを、主はご自分を信じる、ご自分の子たちにも注ぐと約束されました。預言者ヨエルも、終わりの日には、すべての人に主が御霊を注がれるという預言を行ないました。そして、使徒の働きでそれが実現します。イエス様が甦られ、弟子たちの間に四十日現れて、そして、「ヨハネは水でバプテスマを受けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。(使徒 1:5)」そして、聖霊のバプテスマを受けた弟子たちが、力強い主の証しを立てていきました。その福音の宣言はさることながら、彼らの間に確かに愛がある、互いに仕えている、そうした変化があったのです。

そして、「火のバプテスマ」であります。これは聖めを与えてくださるバプテスマとも取れますが、ここでは主に、ここにいるパリサイ派やサドカイ派、心をかたくなにしている者たちに対するバプテスマです。それが火であるということですが、マラキの預言において、「見よ。その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行なう者は、わらとなる。(4:1)」という言葉のあるように、神の義、神の正しい怒りは、火によって現われます。

12 手に箕を持っておられ、ご自分の脱穀場をすみずみまできよめられます。麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。

主が裁かれる時に、麦は倉に入れて、殻は風に飛ばされ、また火によって焼かれるというこの言葉は、神が正しい者をご自分の国に入れ、悪者を火の中に投げ入れ、そうやって選り分けをされること

について、預言者たちは語りました。詩篇 1 篇でも、主の教えを喜びとする者は水路の傍に植えられた木のように、多くの実を結ぶが、「悪者は、それとは違い、まさしく、風が吹き飛ばすもみがらのようだ。それゆえ、悪者は、さばきの中に立ちおおせず、罪人は、正しい者のつどいに立てない。(5-6 節)」とあります。イエス様の、天の御国の奥義の喩えで、同じことを語られました。

## 2A バプテスマによる任命 13-17

このようにして、力強い説教をヨハネは行っていました。主が、ご自分の国を建てるのが近い。だから主がことごとく、悪者を火で裁かれる。だから悔い改めて、主に立ち帰りなさい。主が来られるのを用意しなさいと説いたのです。そして次に、その方が来られます。しかし、非常に驚くかたちで来られます。

### 1B 主の受洗 13-15

13 さて、イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるために、ガリラヤからヨルダンにお着きになり、ヨハネのところに来られた。

「イエスは、ヨハネからバプテスマを受ける」ために来られました。ちょっと待ってください、ヨハネが次に話しますが、ヨハネは悔い改めのバプテスマを授けていたのです。自分の後に来る方は、自分よりも偉大で、その方の靴の紐も解く値打ちがないと言っていました。その方が、なぜヨハネからバプテスマを受けられるのでしょうか？ここが、福音のパラドックス、逆説と言ってもよいでしょう。使徒ヨハネが、福音書の中で話しました。「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。(1:17)」マラキは、終わりの日にモーセの律法を記憶しなさいと説きました(4:4)。そして律法の呪いが来る前に、預言者エリヤによって主に立ち返り、そして滅びから免れることができる、と説きました。そして事実、ヨハネはその悔い改めを説いています。けれども、その律法は、恵みとまことの中で、イエス・キリストによって実現するのです。律法は、神の正しさ、聖さ、神の良さを示すことはできました、へりくだる者たちに対する憐れみと恵み、そこにある真理は実現していませんでした。イエスが、その恵みを実現されます。

イエス様は、神の義について、神の正しい裁きについて、それを引き落とすことは決してなさいませんでした。むしろ、パリサイ人や律法学者の義にまさらなければ、天の御国に入ることはできないと断言されました。恵みが、神の正しさを無効にするものではありません。いや、実現するのです。悔い改める者たちに対して、無限の恵みを注いでくださり、事実、その人が本当に変わることができるようにして下さいます。律法によって罪に定められるような者が、それでも憐れみを受け、恵みによって正しいとされるようにして下さいます。

ところでイエス様は、ガリラヤにおられました。ナザレの町におられました。ガリラヤにいる人は、いつもヨルダン川沿いを歩き、しばしば、ヨルダン川を東に渡河して、南下し、それから再び西に渡河し

て、それからエリコ経由でエリサレムに上りますが、イエス様も同じ道を辿られ、ガリラヤからヨルダンのところまで歩かれました。

14 しかし、ヨハネはイエスにそうさせまいとして、言った。「私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか。」

ヨハネは、へりくだった預言者です。自分自身が罪深い者、イエス様の前ではそこに立つことのできない者、火のバプテスマを受けなければいけない者であることを分かっていました。それでイエス様から、悔い改めのバプテスマを受けなければいけないと感じていました。

15 ところが、イエスは答えて言われた。「今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」そこで、ヨハネは承知した。

イエス様が、意味深なことを語られています。「すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです。」その正しいこと、すべての正しいこととは何でしょうか？一つに、ヨハネが神から来た預言者であるということを、イエス様を通して認証を受けているということです。次に、イエス様は、これから罪を告白し、悔い改める者たちと同じようになられるのです。罪は犯されませんが、罪を犯して罰せられる者と同じようになられます。そして三つ目、イエス様は、バプテスマを授けなさいと弟子たちに後に命じられます。父、子、聖霊の名によるバプテスマ、イエスの御名によるバプテスマを授けていきます。この時の模範として、イエス様はヨハネからバプテスマを受けられたのです。

ですからイエス様は、反対のバプテスマを受けられました。私たちはイエスにつくバプテスマを受けます、けれどもイエス様は私たち人間と一つになるためのバプテスマを受けられたのです。渡したちと歩調を合わせて、共に歩いてくださるバプテスマを受けてくださったのです。神の身分であられるのに、それに固執することなく、人の姿を取って、しもべとなりました。

## 2B 天からの認証 16-17

16 こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった。

イエス様は、水の中に入られて、すぐに水から出てこられました。すると、「天が開け」とあります。神ご自身の介入です。預言者エゼキエルが、あの神々しい幻、ケルビムとその上におられる主の御座の幻を見た時、「天が開け」たとあります(1:1)。

そして、「神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られる」とあります。メシヤの特徴は、聖霊に満たされているということです。「イザヤ 11:1-2 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝

が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。」

そして「鳩」は、清さ、純真さ、それから平和や慰めを表していますね。ノアの箱舟のことを思い出してください、窓から初めに鳥を放っています。けれども、出たり入ったりしています。海面に浮かんでいる死体をついばんでいたことでしょう。レビ記でも、猛禽類は汚れた動物に入れられています。そして、地面が乾いて出てきているかどうかを調べるために、鳩を放っていますね。すぐに戻ってきていますが、七日待つてはなったら、なんと、むしとったばかりのオリーブの若葉をくちばしにくわえていました。ノアは慰めという意味合いを持った名前ですが、神の裁きがあったけれども、主が慰めを与えておられ、平和と安息を与えられるという意味があります。ヨハネは、聖霊を火と共に語りましたが、イエス様が鳩のかたちをした聖霊を受けられたというのは、印象的です。エリヤが神の裁きを預言し、彼が生きたために鳥が肉を持ってきたとあるように、神は裁きをヨハネによって示し、それと共に鳩による、慰めと平和をもたらす聖霊の働きを、イエス様によって与えてくださいます。私たちは、この聖霊をいただいています。慰め、励まし、徳が高められ、癒しを受けます。安きを得ます。

そして、もう一つの意味もあるようです。イエス様に鳩のような聖霊が降ったというのは、創世記 1 章 2 節も反映しているのだそうです。「やみがたいなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。」ここの動いていたという動詞が、鳩が巣の上を動いているような動作なのだそうです。したがって、大いなる闇があり、そこに御霊が鳩のように来られて、そして「光あれ」と神が語られますが、それによって光が与えられます。御霊が来られて、そしてイエス様が世の光として、人々を光へと導いてくださいます。

17 また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」

父なる神の認証です。ここでは、二つの御言葉が背景にあります。一つは、神がご自分の独り子として愛しておられる言葉です。詩篇 2 篇にあります、「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。(7 節)」もう一つは、イザヤ 42 章 1 節にあります、「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。」父にこよなく愛された方です。そして、この方は選ばれた方キリストであり、神のしもべとして喜ばれていました。なんとすばらしいことでしょうか、イエス様が神の子、つまり神であられ、そして主のしもべ、人の姿をとって仕えてくださいました。イエス様こそが、神と人との分岐点です。イエス様にあって、私たちは神を知ることができます。天に触れることができます。安きを得ることができます、重荷を降すことができます。天につながるすることができます。そして、私たちの弱さを知らないことはありません。私たちと一つになってくださっています。